

## 平成一九年秋の展示会報告

『漢籍』と題した本展示会では、アジア共通の文化遺産である漢籍のうち五一点を展示しました。

漢籍とは、中国最後の清王朝までに漢文で記された書物で唐本とも呼ばれ、我が国のみならず当時の朝鮮半島から越南（現在のベトナム）まで広く読まれたものです。そしてそれらの一部は、我が国や朝鮮半島でも復刻されて、現在でも和刻本、朝鮮本として伝えられています。

さて、当館所蔵のほとんどの漢籍は、徳川將軍家の紅葉山文庫と江戸幕府の官立学校である昌平坂学問所に収められていたものを国立公文書館が引き継いだものです。そのために、世界に類を見ないものを保存するとともに、善い版本や由緒正しき版本を多数所蔵していることでも有名です。

漢籍に馴染みの薄くなった現在ですが、漢字を使って文化を形成した一端に思いを致すとともに、それらを保存する国立公文書館の役割をご理解頂きたく存じます。

なお、福田前総理もご視察されました。

展示は、重要文化財（宋版と元版）、元版と明版、朝鮮本、和刻本、挿絵本と套印本の五部門に分かちました。本稿では重要文化財（宋版と元版）に簡略な解説を施し、以下は展示書目を掲載します。

重要文化財は当館所蔵の二一一部の漢籍です。展示した宋版とは二二―一三世紀の南宋の時代に印刷刊行された希少な書物で、元版は二三―一四世紀の元の時代に印刷刊行された貴重な書物です。

### 一、全相平話 元、至治刊

全相とは、すべてのページに挿絵があることです。平話とは、歴史家が歴代の興亡の歴史に批評を加えた物語のことです。本書に収められた「三国志」は、明の時代の羅貫中の作品と伝えられる「三国志通俗演義」のもとともなり、国立公文書館だけの所蔵です。

### 二、廬山記 陳舜俞 宋、紹興刊

北宋の陳舜俞が劉渙とともに廬山を遊覧したのち、自らの見聞と劉渙の詳細な廬山の地理や名所旧跡、名士の略伝、廬山を詠んだ詩文等を分類収録した、廬山の詳細な案内書です。五冊が完全に揃った宋刊本として高く評価されています。

### 三、東坡集 蘇軾 宋刊

北宋の蘇軾（一〇三六―一一〇一）の詩文集です。禅を信奉した蘇軾は号を東坡居士としたので、一般的には蘇東坡の名で親しまれています。本書は、「東坡集」として現存する最古の版本で、南宋（一一二七―一二七九）の時代に刊行されたものです。

### 四、類編増広 穎浜先生大全集 蘇轍 宋刊

蘇軾の弟、蘇轍（一〇三九―一一二二）の詩文集です。穎浜とは、晩年に穎昌（現在の河南省許昌市）に隠居して穎浜遺老と号したことに由来します。

父の蘇洵、兄の蘇軾とともに、唐宋八大家の一人です。本書は、南宋の孝宗の乾道年間（一一六五―七三）の刊本で、他に

伝本は確認されていません。

五、淮海集 秦觀 宋刊

本書は、北宋の蘇軾から「楚辭」の代表的作者屈原ほどの文才があると絶賛された秦觀（一〇四九～一一〇二）の詩文集です。秦觀は蘇軾の門下で、黄庭堅（一〇四五～一一〇五）、晁補之（一一〇五三～一一一〇）、張耒（一一〇五丁～一一二二）とともに「蘇門の四学士」とされました。

本書は、南宋の乾道九年（一一七二）の刊本です。

六、豫章先生文集 黄庭堅 宋刊

北宋の詩人、黄庭堅の詩文集です。号が山谷であることから、黄山谷先生の名で親しまれています。熙寧五年（一一七二）、北京国子監教授となった黄山谷の詩を一読した蘇軾はその才能に驚き、以後互いの詩の交換が始まります。のち、蘇軾に師事した黄山谷は張耒、晁補之、秦觀らとともに「蘇門の四学士」の一人とされ、さらに詩書画に傑出した黄山谷は師の蘇軾と名声を同じくし「蘇黄」と称されました。

本書は、南宋の孝宗と光宗の二代、西暦一一六二年から一一九三年の間に刊行された最初の刊本とされ、国立公文書館以外に伝本の確認はできません。

七、平齋文集 洪咨夔 宋刊

南宋の政治家、洪咨夔（？～一二三六）の詩文集です。中書舎人・刑部尚書・翰林学士などを歴任した洪咨夔は内制（皇后・皇太子を定めること、大征伐に関することなどの重大事項で、中書を経由せずに直接皇帝から指示されて作成する詔勅）や外制（一般的な詔勅）などに関わった文章を多数収録しています。

南宋中期（一二世紀末）の刊行とされる本書の宋刊本は、他に存在しません。

八、梅亭先生 四六標準 李劉 宋刊

南宋の李劉の詩文を、門人の羅蓬吉が編集した、南宋の刊本で、同版本の存在は他に確認されていません。

梅亭は、李劉の号です。書名の「四六」とは宋代に使われた語で、四六文（駢儷文）のことです。また、「標準」とは模範、手本の意味で門人が李劉の作品に敬意を払ってつけた、とされます。

九、鉅宋 広韻 陳彭年等奉勅撰 宋、乾道五刊

本書は、漢字二六、一九四字を音韻によって二〇六に分類して配列し、字ごとに音と意味とを記した代表的な韻書です。詩などを作る際、相互に押韻できる漢字の検索に使います。北宋の真宗の景德四年（一一〇七）、陳彭年らが勅命によって編纂しました。

宋・元・明の初期までに広く普及したので版本も多くありますが、南宋刊本で最も古く、一冊も欠けずに残っているのは、当館所蔵の本書だけです。

一〇、周易新講義 龔原 宋刊

「周易」は「易経」あるいは「易」ともいいます。「周易」は時代の推移とともに深遠な哲学書として尊重され、魏の王肅（二二六～四九）をはじめ、各時代の思想家が注釈を加えました。「周易新講義」もその一つです。著者である龔原は若い頃、北宋の新法党の指導者王安石（一〇二一～一〇八六）に師事しました。のちに王安石は宰相となり、龔原は国子司業（政府直轄の学校や教育行政を管理した次官兼教授）に在任中、王安石の学問を教授して勢力を振りました。しかし王安石の失脚後は、龔原ともども本書も重視されることなく散

逸し、元代には中国本土でその存在を失った、南宋初期の刊本です。

一一、史略、子略 高似孫 宋刊

著者高似孫は、南宋の官僚で文人、淳熙二年（一一八四）の進士で、生没年は不明です。

「史略」はその名のとおり史記・漢書・後漢書・三國志など、各歴史書やその注釈書の巻数・著者名などの概略を列挙した解説目録です。宝慶元年（一二二五）の自序があることから宝慶年間（一二二二―一二二七）の刊本とされています。

「子略」は子部（古来の図書分類法で、思想書）の簡略な目録です。漢書芸文志・隋書經籍志などの子部に掲載されたものを列挙しています。

なお、「史略」は、中国本土ではすでに亡び、我が国に保存されている書物です。

元版と明版

元版とは一三世紀から一四世紀の元の時代に刊行された書物を指し、明版とは一四世紀から一七世紀の明の時代に刊行された書物をいいます。

- 一二、儀礼図 楊復 元刊（明、嘉靖修）
- 一三、礼記集説 陳澧 元、天曆元刊
- 一四、尚書纂図 元刊
- 一五、春秋経左氏伝句解 林堯叟 元刊
- 一六、論語通 胡炳文 元刊
- 一七、孟集成 元刊
- 一八、四書集註 朱熹 元、延祐刊

一九、楚辞集註 朱熹 元、天曆三刊

二〇、纂図互註 荀子 荀況撰 楊倬注 元末明初刊（明修）

二一、漢書 班固撰 顔師古注 元、大徳刊（明、正徳修）

二二、新編纂図増類群書類要 事林広記 陳元靚編 元、至順刊

二三、韓非子 明、嘉靖刊

二四、太上 老子道德経 何道述注 明刊

二五、管子 房玄齡注 劉績補 朱長春通演 朱養和輯訂 明、天

啓五序刊

二六、孫子集註 黄邦彦校 明刊

二七、後漢書 范曄撰 吳中珩校 明刊

二八、籌海図編 鄭若曾 明、隆慶五序刊

二九、鼎鑠全像按鑑 唐鐘馗全伝 明、万曆刊

朝鮮本

朝鮮本とは、漢字を使って朝鮮で作られた詩文や中国の書籍を復刻して、朝鮮半島で印刷刊行されたものを言います。

- 三〇、句解南華真経 林希逸 （朝鮮）嘉靖元跋刊
- 三一、戦国策 鮑彪注 朝鮮刊（古活・巻六補写）
- 三二、朱子語類 黎靖徳編 朝鮮刊
- 三三、陶淵明集 陶潜 （朝鮮）嘉靖元跋刊
- 三四、唐翰林 李太白文集 李白 朝鮮、正統一二刊
- 三五、剪灯新話句解 瞿佑 尹春年訂正 林莒集釈 朝鮮刊
- 三六、海東諸国紀 申叔舟 朝鮮刊

和刻本

和刻本とは、我が国で漢字だけを使って著した詩文や中国の漢籍を復刻して我が国で印刷刊行されたものを言います。

五二、古詩歸

鐘惺 譚元春編

明刊(三色套印)

三七、貞觀政要 吳兢 慶長五刊(古活・伏見版)

三八、文選 蕭統編 李善等注 陳仁子校 慶長一二刊(古活・

序・卷一・二補写)

三九、孔子家語 王肅注 元和刊(古活)

四〇、近思錄 朱熹・呂祖謙撰 葉采集解 寛永刊(古活)

四一、論語徵集覽 松平頼寛 宝曆一〇刊

四二、七經孟子考文補遺 山井鼎撰 享保一六刊

四三、古文孝經撰字註 九鬼隆都 刊

挿絵本と套印本

小説の読者の関心をよぶために、その場面に関わる絵を挿入したものを挿絵本と言います。また、套印本とは墨で印刷した本文に対する批評文などを朱や藍色などを使って区別した多色刷りの書籍を言います。

四四、鼎鑄京本全像 西遊記 華陽洞天主人校 明刊

四五、二刻 拍案驚奇 凌氏濛初 明、崇禎五序刊

四六、醒世恒言 馮夢龍編 可一居士評 明刊

四七、古今小説 馮夢龍編 明刊

四八、校正原本 紅梨記 徐復祚 元張寿卿 明刊(朱墨套印)

四九、紅氍記 張鳳翼 明刊(朱墨套印)

五〇、繡襦記 薛近兗 明末刊(朱墨套印)

## 平成二〇年春の展示会報告

平成二〇年春の特別展(四ノ五(土)～四ノ二四(木))は、『病と医療 江戸から明治へ』と題し、当館が所蔵する古書古文書及び公文書の中から、江戸時代の資料を中心に、病の歴史、医療と薬、そして健康のためのさまざまな試みを跡づける資料を展示し、あわせて明治以降の公文書等で、医療制度の近代化や公衆衛生確立の跡を辿りました。展示資料全五八点。うち主な展示物は、左の通り。

### 【病の記録】

続日本紀 慶長一九年(一六一四)写 紅葉山文庫旧蔵 全二二冊  
『続日本紀』は八世紀末に成立した勅撰の正史で、天平九年(七三七)の「疾瘡」で「公卿以下、天下百姓」が相次いで倒れ未曾有の死者が出たことなど、疫病の流行が記されています。

見聞集(慶長見聞集) 昌平坂学問所旧蔵 全一〇冊  
江戸前期の仮名草子作者三浦浄心(一五六五～一六四四)の随筆。慶長年間(一五九六～一六一五)に結核と思われる疫病が流行したことを記し、それが薬では治癒できない「気の煩」と見なされていたと述べています。

塩尻 内務省旧蔵 全一〇〇冊  
尾張藩士で国学者だった天野信景(一六六三～一七三三)の随筆。貞享

元年(一六八四)に九州から関東にかけて流行した奇妙な疫病を紹介。長崎で七千人以上、近畿地方でも多数の犠牲者を出しながら、江戸では軽い症状をもたらしたただけで、死者は出なかったと記しています。

弘賢随筆 内務省旧蔵 全六〇冊  
幕臣で国学者、書道家の屋代弘賢(一七五八～一八四二)が、知友が持ち寄った草稿や自分の草稿を綴じたもの。その三三冊目に、曲亭馬琴が江戸で流行した「感冒」を振り返り、それぞれの異名の意味を述べた原稿が綴じられています。「感冒」には流行性感冒(インフルエンザ)も含まれていたと推定されます。

形影夜話 文化七年(一八一〇)刊 昌平坂学問所旧蔵 全二冊  
『解体新書』で知られる蘭方医杉田玄白(一七三三～一八一七)が、七〇歳の年、藩医として若狭小浜藩邸に宿直していた折に、往時を振り返り、医学についての所信を記した書。江戸で梅毒が蔓延していた様子がかげえます。

### 【養生のこころみ】

養生歌八十一首 刊 全二冊  
幕府の奥医師(漢方)多紀元徳(一七三一～一八〇二)が、天明八年(一七八八)に著した『養生大意抄』の内容を、養生の基本的心得、飲

食、飲酒、性生活などのテーマにそって、八一首の和歌に詠んだもの。

老人必用養草 昌平坂学問所旧蔵 全五冊

豊前中津藩の藩医を務めたのち京都で医業を営んだ香月牛山（一六五六

一七四〇）の著で、正徳六年（一七一六）に出版された、高齢者及び高齢者を看護する家族のための総合的医学書。高齢者の病氣予防の知識だけでなく、日々の過ごし方や高齢者特有の心理についても細やかに記されています。

備急千金要方（孫真人備急千金要方） 万治二年（一六五九）刊 紅

葉山文庫旧蔵 全一六冊

中国唐代の医学者孫思邈が唱えた性行為による健康法「房中補益」の術の効用が記されています。

坐婆必研（病家須知） 天保三丁五年（一八三丁三四）刊 昌平坂

学問所旧蔵 全八冊

『坐婆必研』は、別名『とりあげば、心得草』。助産婦に必要な知識や技術そして心得を挿絵入りで解説した書で、文政一三年（一八三〇）に成立。平野重誠が著した一般向け家庭医学書『病家須知』と合わせて出版されました。

#### 【医者と薬】

医戒 嘉永二年（一八四九）刊 昌平坂学問所旧蔵 全一冊

杉田玄白の孫で若狭小浜藩主の侍医を務めた杉田成卿（一八一七 五九）が、ドイツの医師フーフェランドの著を翻訳したもの。西欧における医

者の倫理が詳しく紹介されています。

重訂解体新書 文政九年（一八二六）刊 教部省旧蔵 全一四冊

安永三年（一七七四）に出版された『解体新書』の改訂版。杉田玄白から改訂を託された弟子の大槻玄沢（一七五七 一八二七）らの尽力で完成。『解体新書』が木版だったのに対し、銅版を用いてより細密な図を掲載しています。

六物新志 天明六年（一七八六）序刊 全二冊

大槻玄沢著。一角（ウニコウル）・泊夫藍（サフラン）・肉豆蔻（ニクズク）・木乃伊（ミイラ）・噎蒲里哥（エブリコ）・人魚（ニンギョ）の六つについて、それぞれの薬効などをオランダ語の文献等を引用して紹介した書。木村蒹葭堂の私家版。

広恵濟急方 寛政二年（一七九〇）刊 紅葉山文庫旧蔵 全三冊

十代將軍徳川家治が、奥医師の多紀元徳に命じて編纂させた、救急治療集成。各種中毒・中暑（熱中症）・産前産後の急症・吐血・血尿・脱頷（あごが外れること）等々、さまざまな場合における救急処置の方法が平易な文章で書かれています。

#### 【本草図譜】

庶物類纂図翼 安永八年（一七七九）成立 紅葉山文庫旧蔵 全二八冊

旗本の戸田祐之が十代將軍徳川家治に献上した薬草図集。五二九点の彩色図を収録。国の重要文化財。

華鳥譜 万延二年（一八六一）成立 内務省旧蔵 全一冊

漢方医で本草学者、書誌学者としても知られる森立之（一八〇七—八五）が作成した鳥類図譜。食用となりうる六一種の鳥の彩色図に、それぞれの味や効能、毒の有無などを記した解説が添えられています。図を描いたのは、絵師の服部雪斎。

驥艦脚気病調査書」「日露戦役海軍衛生史」「虎列刺予防諭解」「コツホ氏ノ大発明（諸雑公文書）」「医制編成上申（公文録）」「産婆規則制定の件（公文類聚）」

### 【江戸から明治へ】

脚気病院報告 明治二二—一五年（一八七九—八二）刊 全三冊

多くの人命を奪い国民病のひとつとなっていた脚気の治療のために開設された官立脚気病院の年次報告書。治療成績などが記されています。

博愛社設立の願書（諸雑公文書）

明治一〇年（一八七七）四月六日に、元老院議員佐野常民らが、敵味方の別なく傷病者の救護を行う博愛社の設立を政府に出願した文書。

右のほか以下の資料を展示しました。

「年代記残編」「妙法寺記」「時還読我書」「安政箇旁痢流行記概略」「疫毒預防説」「武江年表」「官府御沙汰略記」「断毒論」「養生訓」「養生大意抄」「啓迪集」「経脈図説」「赤鳳髓」「小児必用養育草」「産育全書」「大名の湯治願い（多聞櫓文書）」「大久保参議湯治願（公文録）」「日本温泉独案内」「志都能石屋講本」「医家初訓」「幕府奥医師の起請文（多聞櫓文書）」「中風閉脱弁」「図註八十一難経弁真」「蔵志」「和蘭医事問答」「本草綱目」「傷寒論」「遠西医方名物考」「江戸買物独案内」「普救類方」「遊歴雜記」「日東魚譜」「長崎港全図」「斬罪ノ遺体ヨリ人胆等ヲ取り密売買并刀剣利鈍ヲ様シ禁止ノ儀申立（公文録）」「聖上再御種痘之儀建言（公文録）」「龍